

# 歴史的仮名づかひを習得する為の『手引書』

戦後教育を受けて育った私にとって、「歴史的仮名づかひ」で正確に書くのは未だに難しいことです。

『澤部通信』は、皆様のご支援により、七十三号を数へ、編集の積み重ねのせるか、「澤部通信」の「歴史的仮名づかひ」の間違ひで、長内俊平さんのお手をおつたはずとは、当初に比べ、少なくなつたものの、やはり訂正が出る始末です。

日本の文化・伝統・歴史の破壊をならつて、戦後占領行政により強行された、国語政策のもたらした弊害は、まことに大きく、そのおろひどほりだ、私達の祖先が守り、育んできた、美しく、豊かな日本語が破壊され、今や失はれつつあります。日本の古典は、勿論「歴史的仮名づかひ」により表記されてゐるので、日本の文化・伝統・歴史を正確に学ぶためには「歴史的仮名づかひ」をあらためて習得しなければならないと言ふ、不道理かつ情けない状況にあります。「澤部通信」を編集してゐて、感じるのですが、戦後教育を受けた世代の人に「歴史的かなづかひ」の間違ひが多く見受けられますが、当然のことと言入ます。

さうは言つても、日本人である以上、占領政策による戦後教育のもたらした悲劇として見過ごしては出来ない気持ちがあります。日本語を正確に表現出来ないといふことは、日本人としての学力の低下であつて、これでは日本の文化・伝統の継承は出来ないのではないですか。日本人の一人としてこの憂ふべき状況を何とか打破しようと言ふ思ひで、この「手引書」を作成致しました。

福田恆存先生の「私の国語教室」、林武先生の「国語の建設」、神社本庄研修所発行の「歴史的仮名通ひ」等を参考文献としました。

この「手引書」を作成し終へて、「現代仮名づかひ」がいかにヤカラメで、いい加減なものであるかを、あらためて痛感させられました。

それと同時に感じさせられたことは、意外にも、「歴史的仮名づかひ」は極めて論理的であり、特に活用動詞については一貫してあります、先づ原則を覚え例外を承知してをれば、決して難しくなつた言ふことです。一刻も早く「歴史的仮名づかひ」に戻つて貰ひたいと切望するものです。

「歴史的仮名づかひ」を習得するためには、自分である程度、努力しなければならぬのは当たり前ですが、皆さんが「歴史的仮名づかひ」に親しみを覚え、「歴史的仮名づかひ」を習得なさる「助」だ、「手引書」がなればと思ひます。「手引書」にない言葉は御自分で辞書をお引き下さい。

なほ、この「手引書」に例示されてゐる言葉が全部を網羅してゐるわけではありませんし、追加すべき点、改善すべき点が多々あると思はれます。

お気づきの点を、皆様よりお寄せ頂き、改訂版を後日発行したく、協力の程宜しくお願ひ申し上げます。(平成六年九月吉日 澤部 壽孫)

## 一 活用語尾の仮名づかひ

(一)	「あ行」の活用語	頁数(一)
(二)	「か行」の活用語	頁数(二)
(三)	「た行」の活用語	頁数(二)
(四)	「な行」の活用語	頁数(三)
(五)	「を行」の活用語	頁数(三)~(四)
(六)	「わ行」の活用語	頁数(四)
(七)	「文語活用」のまへ	頁数(四)

## 二 歴史的仮名づかひの原則と例外

(一)	「ら」と「り」と「る」の区別	頁数(五)
(二)	「う」と「む」の区別	頁数(六)
(三)	「え」と「へ」と「え」の区別	頁数(七)
(四)	「お」と「ほ」と「を」の区別	頁数(七)
(五)	「わ」と「は」の区別	頁数(八)
(六)	「じ」と「ぢ」の区別	頁数(八)
(七)	「ず」と「づ」の区別	頁数(九)

## 次

## 目



(四)「はる行」の活用

①「八行四段活用語」は、多くありますが、打消の助動詞「ず」をつけて「・・・ワす」のやうな「ワ」の音が出る動詞は「八行四段活用語」です。次のやうに活用します。(後述の(五)「や行」、(六)「わ行」以外はすべて「は行」です)

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「言ふ」	言は	言ひ	言ふ	言ふ	言入	言入

主要な「八行四段活用」の動詞

購ふ	論ふ	味はふ	扱ふ	会・合・違ふ	遭・遇ふ
争ふ	洗ふ	憩ふ	祝ふ	厭ふ	言ふ
伺う	失ふ	疑ふ	奪ふ	占ふ	潤ふ
歌ふ	敬ふ	思ふ	憂・愁ふ	行ふ	観ふ
覆・被ふ	負・追ふ	囲ふ	適・叶ふ	飼・買ふ	庇ふ
通ふ	競ふ	構ふ	氣通ふ	食ふ	狂ふ
嫌ふ	乞ふ	興ふ	逆ふ	従ふ	寐ふ
しまふ	救ふ	損ふ	添・削ふ	漂ふ	害ふ
戦ふ	漂ふ	賜ふ	給ふ	響ふ	違ふ
使ふ	償ふ	繕ふ	集ふ	誓ふ	問ふ
調ふ	弔ふ	伴ふ	習ふ	整ふ	担ふ
臭ふ	似合ふ	匂ふ	願ふ	宣ふ	払ふ
引合ふ	拾ふ	追ふ	齎ふ	膺ふ	舞ふ
向ふ	迷ふ	惑ふ	養ふ	履ふ	貰ふ
備ふ	酔ふ	装ふ	笑ふ		

②「八行上二段活用語」は「強ひ」と「用か」の二語のみです。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「強ひ」	強ひ	強ひ	強ふ	強ふる	強ふれ	強ひよ

(註)「用か」「は」「用ふる」として「ワ行」にも活用します。

③「八行下二段活用語」は終止形が「考ふ、答ふ、支ふ、加ふ、堪ふ」のやうに発音が「ウ」音になります。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「考ふ」	考へ	考へ	考ふ	考ふる	考ふれ	考ひよ

(五)「や行」「わ行」の活用

①「ヤ行上二段活用語」は「射」の二語のみ、「ヤ行上二段活用語」は「考ふ、悔ふ、報ふ」の三語のみです。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「考ふ」	考ひ	考ひ	考め	考ふる	考めれ	考ひよ

(註)「射」の「射」は語幹語尾の区別がなく、文語の已然形は「射す」「射ひよ」であり、「射ひよ」は簡便です。



## 二・歴史的仮名づかひの原則と例外

歴史的仮名づかひについては、先づ原則を覚え、次に例外を覚えることが肝要です。但し、ここに掲げた例外は主に使はれる言葉ゆゑに一応の目やすとしての例外であり、全てではありませんので、わからない言葉は辞書を引いて下さい。

(一) 「い」と「ゐ」と「ひ」の區別

### ○ 原則

- ① 左記の例外「ゐ」を除き、韻頭の「イ、ヒ」は、発音通り、主として「い、ひ」と書きます。  
 ② 左記の例外「ゐ、い、ひ」を除き、語中と語尾の「イ、ヒ」は、発音通り、すべて「ひ」と書きます。

例外(二)・語頭「ゐ」「ひ」を使ふ主要な言葉

ゐ(居)	ゐ(井)	ゐ(猪)	ゐ(圃)	ゐ(支)
ゐ(び)猪類	ゐ(ざり)産	ゐ(び)井戸	ゐ(な)田舎	ゐ(こ)家
ゐ(もり)樂	ゐ(ただ)か(居)高	ゐ(た)け(高)	ゐ(る)居	ゐ(は)感振る

(註) ① 韻頭に「ゐ」を使ふ動詞は「居る」と「感振る」の語のみです。

② 韻頭に「い」を使ふ動詞は「要る、入る、射る、煎る」等です。

例外(三)・語中と語尾「ゐ」「ひ」を使ふ主要な言葉

ある(藍)あを・青	いちる(水)松	かゝる(鴨)居	あぢさる(紫)藤花	くらゐ(位)
くれなる(紅)	くわる(縁)姑	しきる(敷)居	しはる(ま)居	せる(所)為
まどゐる(圍)居	しほさる(瀬)居	もどる(渡)居	つゐ(対)居	なる(地)産

【行上】段活居語(密)ゐるゐる・用ゐる(ゐ)の活用居語

例外(三)・語中と語尾「ゐ」「ひ」を使ふ主要な言葉

一 群「き」が音便変化したものの例

美し	高し	おびて	おほいた	かじ
かゝぞ入(介)添	かゝりな	かゝりまゐる	かゝり	かゝり
さゝいなむ(吐)責	さゝはら	さゝはひ	ぜんま	たぐま
つゝらたち	たわいな	つゝらた	つゝら	つゝら
つゝら	つゝら	つゝら	つゝら	つゝら

一 群「あ」が音便変化したものの例

あゝたぐ	あゝら	あゝら	あゝら	あゝら
あゝたぐ	あゝら	あゝら	あゝら	あゝら

(註) 「あゝたぐ」と「あゝら」とは、音便変化したものの例。

二 群(延音)「え、い、う、え、い、う」の例

えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)
えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)
えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)	えい(延)

三 群(その他)

あゝたぐ	あゝら	あゝら	あゝら	あゝら
あゝたぐ	あゝら	あゝら	あゝら	あゝら



(二) 「え」と「あ」と「へ」の区別

○原則

- ① 左記の例外(「あ」を除き、語頭の「エ、ハ」は発音通り、主で、「え、へ」と書きます。  
 ② 左記の例外(「あ」と「え」を除き、語中と語尾の「エ」は、ほとんど「へ」と書きます。

例外 ① 語頭に「あ」を使う主なる言葉……あ(絵)

あ(鯉)

あがほ(笑顔)

あかく(描)

あがらつばい

あくぼ(團)

あこう(会回)

あじき(会式)

あじやく(会釈)

あぢい(越後)

あぐる(扶)

あふ(酔)

あむ(笑)

ある(彫)

例外 ② 語中語尾に「あ」を使う主なる言葉……いじすあ(礎)

こあ(言)

こずあ(梢)

すあ(末)

ちあ(知恵)

つくあ(机)

ともあ(田)

ゆあ(故)

つあ(杖)

ほほあみ(微笑)

ほろあひ(仄酔)

コ行下一段活語……植う・飢う・据うの三語の活用語尾

例外 ③ 語中語尾に「え」を使う主なる言葉

ささえ(栄耀)

ぬえ(娘)

きのえ(甲)

ひえ(種)

ふえ(笛)

いえ(否)

ひのえ(丙)

ねえさん(姉)

「ヤ行下一段活」の動詞の活用語尾(四買)に述べたやうに未然形・連用形「消え」、命令形「消えよ」に「え」を使う

(四) 「お」と「ほ」と「を」の区別

○原則

- ① 左記の例外(「を」を除き、語頭の「オ」は発音通り、主でして、「お」と書きます。  
 ② 左記の例外(「を」を除き、語中と語尾の「オ」は、主でして、「ほ」と書きます。

例外 ① ……語頭に「を」を使う主なる言葉

を(小)

をがわ(小川)

をぐらい(小暗い)

をやみ(小止み)

を(尾)

を(緒)

ををしい(雄々)

をか(丘・岡・陸・傍)

をかしい

をき(萩)

をけ(桶)

をこがましい(愚拙)

をこそつまん

をけら(植物)

をさ(長)

をさ(ま)

をしへ(教)

をす(雄)

をてり(樽)

をてて(一昨年)

をとり(嫁鳥)

をさない(幼・稚)

をちび(越度)

をどり(踊)

をててひ(一昨日)

をどこ(男)

をとめ(少女)

をち(叔父・伯父)

をは(叔母・伯母)

をんな(女)

をこと(夫)

をほり(終・了)

をばな(尾花)

をひ(甥)

をの(芥)

をり(檻)

をりをり(折々)

をうち(大蛇)

をる(屈)

をる(折)

をしむ(惜)

をかす(侵・犯・冒)

をがむ(拝)

をし(か)教

をさむ(治・納・収)

をのく(戯)

をめく(叫喚)

例外 ② ……語中語尾に「を」を使う主なる言葉

あを(毒)

いさを(煎・功)

うを(魚)

かをり(蕪・香)

かはうそ(川獺)

たを(か)婦

たを(や)め(手弱女)

とを(十)

さを(竿・棹)

し(き)り(採)

は(せ)を(芭蕉)

かつを(煙)

ひを(氷魚)

ひを(て)し(耕織)

み(さ)を(棟)

み(き)つ(て)し(落)

め(を)と(夫婦)

し(を)れる(羨)

ま(を)す(甲)

(註) ① 接頭語の「を」には元来「弱小」、若「い」、愛らしい」の意があり、「をみな」は若い女を、「おみな」は老女を意味します。

② 「お」は語頭だけで語中語尾にはこないが、唯一の例外は「はおり(羽織)」です。



